

水産ジャーナリストの会

会 報



NO. 133

Japan Fisheries Journalists' Association

2015年3月11日

水産ジャーナリストの会

＝会長：金子弘道＝

事務局：佐藤 安紀子

(中央区銀座3-1 2-1 5)

03-3546-1291

sato@wff.gr.jp

<http://jaef.la.cocan.jp/jf/>

＝2015年度定期総会開く＝

新体制で臨んだ定期総会-年度賞・感謝状を授与

2015年度定期総会を1月27日に大日本水産会大会議室で開催し、2014年度事業報告・決算、2015年度事業計画・予算を了承するとともに、2014年度年度賞に選定された「福島県漁業協同組合連合会」ならびに南日本新聞「かごしま漁の四季」の2件について表彰を行ないました。



左から福島県漁業協同組合連合会・野崎哲会長、金子弘道会長、南日本新聞社・宮路直人副部長

1. 定期総会

総会の冒頭に金子会長が挨拶、中村前事務局長の急逝を受け昨年7月に新体制がスタートしたことを報告。事務の引き継ぎで当初苦労があったが、関係者の協力で資料のとりまとめができたことなど、一連の経緯を説明した。

研究会は昨年度、全部で8回開催。3月に国際司法裁判所（ICJ）の判決があったことを受け、4月23日、5月22日、7月11日と3回にわたり判決の評価と今後の我が国調査捕鯨のあり方について研究会が開催された。

2. 年度賞としての選定理由

○ 福島県漁業協同組合連合会

大震災による放射性物質汚染で2011年3月15日から漁業の自粛を余儀なくされたが、県沿岸漁業復旧のため、2012年2月「試験操業・試験流通検討委員会」を設置した。同年6月には「県下漁業協同組合長会議」において試験操業を決定、放射性物質が国の基準値以下の3魚種を対象とする試験操業を開始した。2014年には国の基準を大きく下回る57魚種に拡大、年間の水揚げ量が700トンを突破、東京をはじめ15都府県への出荷を実現した。県漁業者の熱意と意欲を一本化して試験操業を実施。2万件にのぼる緊急時モニタリング検査とスクリーニング検査により安全性を消費者に確認させ、わが国漁業史上かつてなかった難事を克服した福島県漁連の行動は高く評価される。

○ 南日本新聞「かごしま漁の四季」

漁法に光をあてた好企画連載記事である。漁業国、日本は古来様々な漁法を編み出してきた。全国3位の長い海岸線に恵まれた鹿児島県でも多彩な漁業が営まれている。1年をかけてルポした22の漁法のひとつひとつには、漁業者たちの知恵と工夫が凝縮されている。なかでもブリを餌付けして捕獲する「飼い付け漁」、船底などをたたいてナミクダヒゲエビを追い込む「トントコ漁」、帆掛け船でケタを引くクマエビの「ケタ打た瀬漁」といった伝統漁は記録的な価値が高い。注目したいのはコラムの「人」で登場する漁業者たちの声だ。離島の自然に魅せられたIターン者、漁業への情熱と可能性を語る後継者、地球温暖化のせいか海の異変を訴える声など、そのひと言ひと言に漁業者の誇りと“生きる哲学”が感じられ、人間ドラマとしても興味深い。写真をふんだんに使ったビジュアルな紙面も評価したい。県産魚介類に漁法や漁師の奮闘といった「物語性」を加えて、消費者の地産地消を促し、また地域の食育に役立てたいという編集者の意図が十分伝わる優れたルポルタージュである。

3. 金子会長挨拶

水産ジャーナリストの会は水産業の振興に貢献した個人や機関を対象に毎年表彰を行なっています。昨年度は福島県漁業組合連合会の活動と、南日本新聞

社の「かごしま漁の四季」の2件を年度表彰の対象に選定しました。福島県漁連は放射能汚染で漁の自粛を余儀なくされる中で「試験操業・試験流通検討委員会」を設置、わが国漁業史上かつてない難事を克服しました。こうした行動は高く評価されると思います。南日本新聞は「かごしま漁の四季」という企画記事を連載、漁法に光を当てました。漁業国・日本は古来から様々な漁法を編み出してきました。漁法を通して消費者の地産地消を促し、地域の食育に役立てたすぐれたルポルタージュです。受賞された福島県漁連と南日本新聞は今後とも水産業の発展に貢献していただければと思います。

4. 来賓祝辞

○ 水産庁・香川謙二次長

水産ジャーナリストの会には、われわれ水産庁の様々な活動を内外にご紹介頂き、大変有難うございます。この場を借りてお礼申し上げます。また、受賞者の方々にはお祝いを申し上げます。福島県漁連はまだ試験操業ということですが、私どもも試験操業のあり方、今後の進め方については常に議論させていただいております。また、福島県の汚染水処理については、私どもも支援しております。やはり、漁業として魚をとれるという状況を早く作っていくことが大事だと思います。われわれとしてもこれから最大限協力していきますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。南日本新聞の受賞についても大変ありがたいと思います。私ども浜プランとうことで、何とか漁業を振興したい、活性化を図りたいと考えております。このような形で紹介していただけることは大変ありがたいと思っています。受賞者にお祝い申し上げますと共に、水産ジャーナリストの会がますます発展することを祈念して、挨拶とさせていただきます。

○ 大日本水産会・白須敏朗会長

今年は羊年ということですが、魚と羊が出会いますと新鮮の鮮という字になります。活きのいい魚を扱う私ども水産業界にとって、まことにふさわしい年ではないかと思っています。また、私ども業界と一番縁の深い水と羊が出会いますと、水というのはサンズイですね、太平洋の洋、前途洋々たる洋になります。従いまして、今年は水産業界にとりまして洋々たる前途が開けている、こういう大変に縁起の良い年であります。こうした中で水産業界の課題は、水産・日本の復活ということであります。かつて日本は世界に冠たる水産国でありました。生産量も1000万トンを上回って世界一の水揚量を誇りました。消費量につきましても世界一の魚食民族でした。国民一人当たりの魚の消費量もず

っと世界一を保ってきました。残念ながら最近はポルトガルや韓国にも抜かれ、いまや世界3位に後退しています。こういうことではいけないので、なんとか需要面、供給面でテコ入れをし、水産・日本を復活させたいと考えています。そういう中で今年は、大震災から4年目を迎えます。福島県漁連は大変厳しい状況のなかで消費者にたいする情報提供につとめるなど、福島の漁業の復活に取り組んでこられました。震災からの復興なくして水産日本の復活はありません。わたしどもこれからも全力で支援していくつもりですが、福島県漁連におかれましても今後とも全力で福島の漁業復活に取り組んでいただきたいと思います。南日本新聞の連載企画を拝見しました。水産・日本の復活のためには生産、消費の両面で様々な取り組みが必要になります。特に地域の活動が大切になると考えています。そういう意味で私どもの知らない地域の工夫を取り上げながら、地域の活性化を図るという点で、今回の受賞は誠に当を得たものと思います。受賞した皆さんにお祝いを申し上げるとともに、今後一層のご活躍を期待したいと思います。

5.受賞者挨拶

○ 福島県漁業協同組合連合会・野崎哲会長

本日は年度賞をいただき大変ありがとうございました。水産ジャーナリストの会におかれましては、われわれ福島県漁連の活動をご評価いただいたこと大変ありがたく思っています。福島県の漁業は原子力発電所の事故が続く中、最初3魚種から始まりいま57魚種、トロールからはじまったものが船曳網、小手付き刺し網へと広がり、福島県の漁業全種に及んできました。この機会に改めてメディアの方々にお伝えしたいのは、震災後のこの4年間、本当にありがたいと思ったのは水産庁との連携の緊密さです。厚労省が設置した基準値の中、漁業再開に当って「安全宣言」という要望が漁業者からでましたが、政府はそうした形はとれないということでした。そんな中で水産庁のご提案により復興協議会を国、県、学識経験者が参加して創設、その中から試験操業をやっていくという段取りになりました。その時に、水産庁の方々から間接的にも国が参加して試験操業を認めたということは、公式にできる安全宣言ではないが、かならず国がかかわっていくという決意の表れだとの説明を受けました。震災当初、役所は担当者を福島担当、宮城担当、岩手担当という形で震災県別に置いてくれました。ここで一気通貫、ありとあらゆることをやってくれるという、本当に離れ業をやったのけてくれました。私ども今日あるのも震災当初の水産庁の初動の良さが大きかったと思っています。今後皆様方にわれわれの活動のご検証をいただきながら、安全で安心な福島の漁業を再構築していきたいと思

います。今回の震災にかかわりまして役所と団体がこのように親密に活動できたことを念頭に置いて検証していただければ、私どもとしては本望でございます。本日は大変ありがとうございました。

○ 南日本新聞社・宮路直人副部長

このたびは歴史のある賞をいただきまして本当にありがとうございました。大変光栄に思っています。「かごしま漁の四季」というのは実は15年前に聞いた話からはじまっています。それはブリの飼付け漁というものです。この漁法は、毎日同じ時間に同じ場所に餌を撒きます。それを何日も繰り返すとブリが池の鯉みたいになります。そうすると船が来るだけでそこにブリが集まるようになる。そこにある日突然、針のついた餌が入ってきてブリが大漁にとれるようになる。この漁が鹿児島発祥の漁ということを知りました。この話を取材現場で確認しながら1年間、22回にわたっていろいろな漁のやり方をルポルタージュしてきました。鹿児島県は非常に広大な海に囲まれていて、海岸線の距離は北海道、長崎県に次いで第3位です。海洋圏ですが鹿児島黒豚のイメージがありまして一般には畜産県だと思われています。県民もそう思っています。だから海の恵みに対して関心がない。この連載を始めれば、漁の現場とか漁師の苦労を県民が知ることになり、魚介類に愛着がわいて地産地消につながるのではないか。そういうことも今回の連載をはじめの動機になりました。もう一つやっていくうちに動機になったのは記録です。地球温暖化の影響というのは、いま鹿児島県の海でも少しずつ現われています。漁獲量を左右するという例もありますし、漁自体が成り立たなくなる例もあります。後継者がいなくて消えてしまった漁もあります。21世紀の初頭に鹿児島でこんな漁をしていたという記録ができればという思いもありました。幸いにも読者の反応も良くて、県内各地の小中学校の食育教育に使われ、地域の物産館とか県漁連の販促材料になるという例もありました。当初の目的の一つだった地産地消に少しは役立ったのではないかと自負しています。最後になりますが、福島県漁連の出荷再開のニュースは南日本新聞でも大きく取り上げさせていただきました。鹿児島と福島は離れていますが、今後とも紙面で応援していきたいと思っております。頑張ってください。本日はありがとうございました。

6. 感謝状贈呈

水産ジャーナリストの会は昨年で30年を迎えることになった。顧問である株式会社水産社社長・熊沢弘雄氏は当会創立に参加し、献身的な貢献を果たすとともに自らも活発な言論出版活動を通じて内外に指導力を発揮し水産ジャーナ

リズムの地位向上に努めた。その業績を湛え感謝状の贈呈式を行った。

○ 水産ジャーナリストの会顧問・山地進氏挨拶

30年前1985年1月下旬に創立総会をして今日に到った。当初はよくて4・5年かと思っていたが、30年というところまで来た。最初の10年・15年というのは、正に熊沢さんが本当に黒子になり、あらゆるものを背負い込んで皆の世話をやきながら努めて来た。これが30年続いた一番の理由である。今日は創立総会の時の趣旨説明書を持って来て皆に読んでもらった。その中で、今と全く同じではないか、という反応があった。そういうことで全体像が非常によく見えていた。そのため呼びかけに対して皆がついてきた。そして非常に山の上がり方が難しい時から全部やってきている。そういったことに対する感謝の気持ちから感謝状を贈呈した。熊沢さんは日ソ漁業交渉のシャケマス記者ということで知られている。熊沢さんがいた時事通信社は色々な情報をITを使って配信することで成長して来た。このような特殊なものを使いながらシャケマス交渉によって水産部というのが大きく育ち今日も立派にやっている。また熊沢さんはそういう一面と同時に、株式会社水産社の社長として水産年鑑や水産週報などを出版している。加えて研究会でどういうテーマを取り上げるかということを通じて水産ジャーナリズムというものを自己の歩みの中でやってきた。戦後70年というが、ジャーナリズムがやり易い状況になったのはGHQをバックに戦争はもうこりごりだという思いを基にしてジャーナリズムが活気を取り戻したからだ。その中で、出版活動も同時にやってきた。水産ジャーナリズムという小さいセクションかもしれないが、一つの旗を振ることで皆の関心を捉えてやってきた。一方ではジャーナリズム、一方では経営者というのは非常に難しい。ジャーナリストは大きく出なければいけないが、経営者は言いたいことも言わないで我慢することが多い。それを両立させてきた。こういうところは非常に素晴らしいと思う。

○ 熊沢弘雄氏挨拶

設立に当たっては軍資金をどうしようかということで悩んだ。一人ひとり会費を3000円程度集めていくことも考えたが、それでは講師を呼んで謝礼をして会報を出すことが出来なかった。そこで、日本水産を始め大手水産会社に相談することになった。それぞれの社長に相談したところ、それは大変いいことだ。農産物はよく知られているが、海産物については皆よく分かっていない。ぜひ水産物の普及を図るためにやってくれ、という話になった。それから市場の卸売会社や大日本水産会の会長からも応援を頂いた。このようにして、大方の賛同を得て軍資金の目途もついたことでスタートした。設立当時の状況と今

日の状況を比べてみると全く変わっていない。一つは魚価が出ない、魚価の下落ということである。業界は何とかしたいという思い。そしてわれわれは海の中の魚を勉強したいということが一致したことで前に進んだ。そして、30年間、大日本水産会を始め業界の方々の弛まない応援で今日まで来た。そのことを考えるとこれに勝る喜びはない。

<水産ジャーナリストの会3月・4月研究会のご案内>

○3月研究会

福島県の漁業界は、今なお原子力災害に苛まれています。東京電力福島第一原発は廃炉計画が躓いており、汚染水の止水工事が難航しているからです。本研究会では東京海洋大学准教授の濱田武士氏を招き、この問題について報告して頂きます。

記

日時 2015年3月23日(月) 18:00~19:30(うち質疑応答30分程度)

場所 大日本水産会 8F大会議室

講師 濱田武士氏(東京海洋大学海洋科学部准教授)

テーマ『原子力災害と福島県漁業-汚染水問題をどうみるか-』

○4月研究会

水産ジャーナリストの会4月の研究会は「ミラノ国際博覧会と日本食」です。5月から始まるミラノ万博は世界初の食をテーマにした国際博です。日本も「Harmonious Diversity-共存する多様性-」をテーマに、「日本食」や「日本食文化を世界に発信していきます。日本食の要は魚であることから、農水省外食産業室の山口靖室長にミラノ万博と魚食文化などについてお話を伺います。

記

日時 2015年4月6日(月) 18:00~19:30(うち質疑応答30分程度)

場所 大日本水産会 8F大会議室

講師 山口靖氏(農林水産省食料産業局外食産業室室長)

テーマ『ミラノ国際博覧会と日本食』

<共通>

- ◆大日本水産会は米国大使館近くの三会堂ビルです(港区赤坂1-9-13)
- ◆参加費・資料代は1回500円です(会員除く)。
- ◆研究会への参加は、なるべく事前に下記メールにてお申込み下さい

水産ジャーナリストの会事務局 佐藤安紀子

TEL 03-3546-1291 FAX 03-3546-1164

携帯 080-1378-4114 メール sato@wff.gr.jp

HP <http://jaef.la.coocan.jp>